

ビルマ戦記

福島県 安藤 実

私は大正十(一九二二)年七月十日、現住所である安達郡大玉村に生れました。昭和十六(一九四一)年の兵隊検査は難聴のため第二乙種でしたが、後で第一乙種に編入され、昭和十七年三月一日、教育召集で郡山第六十六部隊に入隊しました。中隊長八島実中尉、部隊長は笠原政彦大佐で、後にビルマ、インパールで戦死した弓歩兵第二一五連隊長でした。

翁島練兵場の思い出

昭和十七年五月、郡山の兵舎を出発、途中磐梯熱海で天幕張りの訓練をしてから翁島練兵場に着了。次の日は九九式の軽機関銃の射撃訓練をし、完全軍装で目標地点まで駆足。直ちに三発、五発の射撃命令で、十発中一発だけの命の中で教官の梅宮見習士官に頭をポカポカやられる。他の兵は一

点も取れなかったほど難しい射撃だ。後で教官が土手の陰でいろいろと軍隊のことを話してくれた。良い教官でした。次の日は雨で途中の磐梯熱海温泉で休憩をして、夜、郡山の兵舎に無事到着した。皆で足に出来た豆にスミを付けた糸を針で通す。

軍隊とは面白い所で、銃の手入れの不十分な奴がいて全員ビンタ、皆で申し合わせて顔に赤チンキを塗ることにした。翌朝点呼の時、中隊長に「その顔は何だ」と聞かれ、全員虫歯の治療と報告する。後で班長は制裁がばれて訓示されたとか、それでまたビンタをとられた。

召集解除

五月二十九日になって、長男の者は子供をつくるために除隊される。二、三男は敬一〇八二三部隊に編入されてジャワに派遣された。これには大山村の菊地武雄、本宮町の佐藤清一が行ったが終戦後元気に復員した。

長男で除隊となった私は、村では皆出征してしまつて男が少ないので、銃後会、警備団、在郷軍

人分会、青年団分団長、青年学校指導員など役付けは何でもやらされた。

臨時召集

昭和十九年九月になって召集令状が来た。九月十三日に東部第六十五部隊に入隊、第八六三七渡河材料第十中隊に編入された。この部隊は土工、トビ、大工、船員などが多く荒っぽい部隊だった。兵舎は藁小屋だった。被服係に鈴木正男さんがいて「御前達はビルマ行きだ」と教えてくれた。

兵舎の後ろが高校なので出発日等を書いた手紙に切手代を添えて、生徒に密かに投函を頼んだ。フイリピンに出発する部隊の小姓内の鈴木正蔵、薄黒内の川越重松の二人に面会謝絶のなか密かに面会が出来た。渡された銃は九九式だが銃身は粗削りで、床尾板は板造り、遊挺は蓋無し、水筒は竹製、飯盒は行季弁当、これでは戦争は出来ないと思つた。

私の出発の日、郡山駅のホームで面会に来ているかも知れないと家族を捜したが見つからなかつた。

た。面会が無いので使役に出ていたら、出発間際になってぞろぞろと家族八人も来た。本宮駅から切符が買えなくて二回に分けてやっと手に入れたので遅くなったという。窓から投げ込まれた土産をみんな食べた。この時妻から子供が出来たと聞かされた。僅か一分間の面会だった。軍隊とは不思議なものだった。大便所の使用は面会者に譲れということが誰いうことなく伝わっていた。

宇品港出航

輸送指揮官は佐藤少尉、助手は星軍曹で宇品港を出港したが敵潜水艦を警戒して呉港に入ったきりで、ようやく十二船団を組んで出港した。私たちの船は「永仁丸」で八千トン級、十二ノットで、毎日、竹や網で魚雷にやられた時の訓練をやつてもらった。

船団は南シナ海を南下し、台湾近くになって敵潜水艦に二隻やられた。敵潜水艦は余り近くから魚雷を発射したので沈没する船の渦に巻き込まれたのか潜る事が出来なくなつてしまった。その敵

潜水艦の乗組員十九人全員を捕虜にした。

後で分かった話によると、我々の「永仁丸」を狙ったが、並んでいる二隻を先にしたので、私達は運良く助かったとか。沈没した二隻には約二千人が乗っていたが助かったのは八十人だけという。

私は船酔いで食欲も無く食べないので便も出ない。一カ月にトイレは一回だけだった。それでも何か食わなくてはと乾パンを一袋も食ってビンタを頂戴した。

船は無事に航行してサイゴンに上陸となったが、私は戦友の担架で上陸となった。陸に上がったから二人分働くからと約束した。そして上陸してから体調もよくなり、現地人が売りに来るオコシがうまいのでタオル等と交換して食べた。よく聞いて見たら彼等は炊事場で捨てた残飯でオコシを作って売りに来るとか、兵隊はまたそれを買って食うとは面白い話だ。

サイゴンからメコン川を船で上る。船が着岸すると現地人が小舟で物売りに来る。船の上と下で、

ロープに着けた籠で買物をする。まるで観光客のような光景であった。船はやがてプノンペンに着き、ここからは毎日行軍となった。また昔日本で使っていた木炭の機関車の引く貨車に乗る。トイレが無いので大便は両方から囲んでもらってやる。下痢患者など皆で助ける。行軍は赤土の軍行路を行き、タイのバンコクに到着。ここは対戦国ではないので平和で何事もなかった。

カンチャナブリ

前の木炭機関車と後の機関車の間に連絡用のロープを張って非常の場合に備える。薪を炊くので火の粉が飛んで来て貨車の天幕に穴が空く。昼間は山に避難しながら薪を採る。カンチャナブリのクワイ川では連合国の捕虜が裸でドラム缶を転がして運搬していた。昼飯になるとその場で作業を止め、口笛を吹いて歌を唄ってから食事にするのだが呑気な連中だった。

郡山の第六十六部隊では、敵はロシア人で身体が大きいから捕まったら駄目だ。ここではロシア

人ではなかったが大きな兵隊だった。この鉄道を作るには枕木一本に一人の割りりで彼らが犠牲となっているとか。墓標や卒塔婆が見事に並んでいる墓地もあった。

貨車がゴロゴロとひっくり返っている鉄道沿いに泰緬国境を突破し、サルウィン川を渡つてから三キロほど歩いてマルタバン通りの民家に入った。部落には二、三十匹の野良犬が吠えているので何か食べ物をあげたら静かになった。

いよいよビルマのラングーンに入る。そして行軍にてシイタゴンバクター後の兵站に無事に入る。若松を出発した二百五人中、佐藤加吉と相撲取り力士外三人が欠けたが全員集合で賑やかとなった。

蘭第六十六部隊

渡河材料第十中隊が解散したとかの情報のため追及出来ず、蘭第六十六部隊ラングーン警備隊となり、満州から来ていた敵部隊に編入されて二個中隊となった。中隊長は鈴木武蔵大尉で隊付に阿賀中尉、大屋中尉、堀井大尉がいた。私は六番で一

等兵になった。終戦後、先の渡河部隊は解散という情報はデマと分った。

私は先に船酔いで世話になった時約束したので恩返しに頑張った。そして私が指揮をとって朝の体操や分列行進を実施した。後で野田准尉に呼ばれ「貴様、国で何をしていた」のかというので、「青年学校の指導員をしていた」と話しますと星一つで良くやったと褒められた。

ある日、現地人が騒ぐので出て見ると敵のB29が一度に六機、火を噴き、次々と空中で爆破したようだった。爆弾を落さない内に高射砲弾に当たったようだ。パラシュートで落ちて来る兵を現地人が棒で叩き殺したという。終戦後、殺された人数だけ日本兵を戦犯にしたとか、犠牲になった兵に哀悼の意を表します。

二月二十二日、インセン県コカインという所で白沢村の遠藤永、中ノ沢スキー場国体選手だった沼尻の和知千代吉など六人が、空爆後の後片付けに行っているうちに二回目の空爆に会い全員死亡

した。亡くなった二人には、私が手紙を代筆した仲だった。幸いと言うか、私はその時ライター分遣隊にいて遠くからその空爆を見ていた。佐藤少尉、矢内、星軍曹、磯谷が当番で外出が出来ないので、私は酒保で四人分の汁粉などを買い、水筒に入れて上げる。彼らは代わりに甘味品配布の時には必ず私にくれる。ライター分遣隊では私が食糧係で、水筒を持てるだけ持って本部に受領に行く。私はタバコを吸わないので、途中で現地人とタバコと好きな物を交換して食べた。

宮城県出身の六年兵の古参兵が分遣隊長になる。分遣隊勤務要領を前任者の資料そのままを動哨勤務に指示するので困ってしまう。長谷川上等兵が復唱出来ずに困っている時、私が言い方を教えたから、逆恨みをされて、復員したら貴様と決闘するとかで、皆驚き心配した。元暴力団か与太者らしく、後で彼はピユ作戦の偵察に出され、敵の重戦車M4に遭遇、逃げる方向を間違えて田の中でやられたらしい。

S上等兵は私と話が合い良い戦友だった。彼の話によると映画俳優の長谷川一夫が林長二郎と名乗っていたころ、彼の顔に斬り付けて傷をつけた暴力団員の暴れ者が俺だったと語った。この人も行方不明になってしまった。

勤務動哨中、拳銃強盗がいると言う知らせで行って見たら現地人二人が騒いでいる。俺の銃は三百メートル届く。お前の拳銃は三十メートルしか届かない。拳銃を離さないと撃ち殺すぞと日本語の分かる現地人に言わせたら拳銃を放したので逮捕して刑務所に引き渡した。その後見に行ったら「マスター、ムカンブ」と笑っていた。

動哨中、ある家の中がおかしいので着剣して入ると、通路の両側に八十人ぐらいが覚醒剤麻薬のタバコを吸って朦朧としている。初めて見て驚いた。長居は危険なので直ぐ出て来た。

ビルマではどこにでも家の周りにケシの花が咲いている。これが原料なのだ。日本の庭に咲くコスモスやホウセンカのように。毒でないケシの花

もある。

戦況悪化

三月十三日、高射砲第二十三大隊に編入されたばかりの時、空爆がありタコ壺に一人ずつ入る。良く中を見ないと中に「サソリ」や眼くら「へび」がいることもあるので要注意である。刺されれば数秒で死ぬと注意された。

対空監視についた時のことだった。片耳難聴で爆音発見は早いが方角が分からず、「監視長どこ見てるんだ。敵機は後ろだぞ」と叱られ私には駄目だった。ある日、敵の偵察機が一機来た。次に大編隊で空爆され火薬庫がやられた。

その後で油脂爆弾が途中で火を噴きながら落下して大火災になり、次にドラム缶を落とす。航角○では高射砲は撃てず、ただ見ているだけだった。高射砲陣地には不思議に爆弾を投下しなかったの
で戦死者も出なかった。

戦況はますます悪化し、ペグーに出兵、狼第四十九師団歩兵第一六八連隊と合同して四月十七日

には森第五二〇部隊を混成で編成し、マンダレー方面に出兵した。その時、ビルマ義勇軍を見送る。

私らは砲兵で大正時代の野砲を貨車に付けて行く。一発打つことにまた陣地を造らねばならない。こんな古い砲では駄目だった。

ある日、宮城県の早坂邦雄、酒井酒蔵と自分の三人で木の下で寝ていたら敵機飛来、見つかり、低空でマンゴの木の上すれすれから銃撃され、酒井君が左手をやられ、私は間一髪で助かった。三人は大木の周りをグルグル回って隠れた。

日本人がいるのがわかれば何回も機銃掃射をして来る。その度に逃げ回る。そして土管や橋の下に隠れる。後から入った者は前に押す。前の者は突き出されてしまう。後の奴を蹴飛ばす騒ぎである。また防空壕では後から入った人の足元に機銃弾がパチパチと来るので前に押す。後で笑って終り、兵隊は皆良い奴ばかりだった。

田の中にいた時は長くなって死んだふりをして
いる。ちよつとでも動けばたちまち弾が飛んで来

る。皆すばやい。洗濯物は午前中にして午後はい物などの干し物は要注意だった。

敵機は午前中は来ない。戦争は明るい内にやり、夜はゆっくり休もうと放送している。日本軍は昼は休んで夜切り込み戦術で動く。イギリスの兵隊は焚き火してビールなど飲んでいる。周囲の立木などは皆バラバラに折れている。鉄道の貨車など穴だらけ、よく兵隊に当たらない。皆隠れるのが上手になった。

ピエ川では橋を爆破して敵が来ないようにし、それにより先は通行止めとなり駅前には多くいる病人や患者のうなる声がひどい。まるで地獄のようだった。前線より後送された患者を輸送する看護婦はモンペ姿で衛生兵と共に逃げて来た。可哀相だが、これが戦争に負けた姿だ、残念でした。

逃避行

私の部隊は九州の菊部隊の後から、マンダレー街道を敵中突破するというので、二日分の飯を持ち、白い布などで目印を付け、「山」と「河」の合

言葉で出発する。毎日敵のM4重戦車が轟々と何百台もラングーンに向って行く。私達は高射砲で戦車を撃った。戦車に向う人間爆弾「アンパン」といわれる爆雷を持って、命令一つで戦車に向って体当たりし死に行く。この有様を私らは高台からただ見ているだけだった。

病死の靖国街道の脇の道を案内兵と共に進んだが、道に迷って菊部隊において行かれてしまった。次の日より毎日逃避行である。自分の部隊の名を書いた紙を木の枝に付けておく、それを見ていつ誰が通過したかが分かる。皆ばらばらに行動する。見つければ空爆される。

渡河などには服を脱ぎ頭の上に入れて渡った。運悪く敵機に見つかればさっと河の中に潜る。また迫撃砲の弾も「ヒュルル」と飛んで来る。敵は落下傘で降りて山の陰から攻撃して来る。もう駄目だ。今度会う時は靖国神社と別れる。捕虜になった。日本兵が拡声機で「日本兵の皆さんもはや三八式歩兵銃は時代おくれです。旧式銃を捨て

て降伏しなさい。精神力の戦いではありません」などと放送している。

雨が降り泥んこになり立つことも出来ない兵隊は、身軽になるために鉄兜と防毒面などを捨てる。飯盒だけは捨てない。下痢止めのため木炭をかじりながら歩いた。

食糧も無く死に切れないでいる兵隊の口には蛆や蛆が出ている。無残な姿、最後には自決する。

この兵隊にも故郷には親兄弟、妻や子が毎日無事を祈っていることを思うと涙が出て悲しくなった。統制力も無い弱い兵隊は道端で死を持つだけだ。

兵補として日本軍人と共に訓練したビルマ義勇軍が三月下旬に反乱し、友軍と思って近づくとやられた兵隊も多かった。義勇軍の班長として行動した日本軍人は全部殺されたようだ。

山の中を何千人もの敗者が後退する。山道を歩いていると藪の蔭から鶏が飛び立つ。野鶏と言った野鶏がいると必ず人家がある。人家に近づくと村の若い者が櫓の上上がり、拍子木を叩く。する

と住民は老人を残し、皆頭の上に南瓜や食糧等を入れてざるを載せ、運んでしまう。

雨期になる前に山焼きをして、その後に種を蒔く。雨期になれば毎日雨が降るので稲が育ち、米の収穫となる。陸稲のもち米である。兵隊が徴発に行くとき、老人の目は苦になるのか、つい物を隠した所に動く、そこを掘って見るとパンの実、バナナ、果物等が入っている。私達は老人に「ジャパンゼック、バイサン、ムシブターメン、ネンネペーパイ」（日本兵お金無い米を少し下さい）といって少し頂きお礼をして来る。

私の部隊は渡河隊なので、ノコギリ、ナタなどを持っていて、竹を刈り筏を作って私達を乗せ向う岸まで送ってくれた。敵さんは時々放送して「日本は負けたのだ。天皇は戦争反対なのだ、悪いのは軍の指導者なのだ。白い布で『アイサレン』だと言って出て来なさい。軍人として恥じない待遇をするから。故郷では妻や子が無事で帰って来ることを祈っているでしょう」といつている

が、誰一人として信用はしなかった。

シタン河のベグータドンとの中間ピリンで歩哨警戒中、私はマラリアに罹り、はじめて高熱を発して歩哨を交代して休憩中に、ビルマ方面軍幹部全員が四月二十六日ラングーン警備のために残された。

砲兵隊はペグーに出兵し、空になったラングーンには連合軍が五月二日に無血上陸し、四日にはペグーも落ち、敵中に残された者は全員自決や玉砕をした。二十三万の兵は十三万になってしまった。

ピリンで原隊と合同、直ちにモールメンに出発したが私はマラリアで部隊行動が出来ないので自決用手榴弾をもらい一人で歩いた。明るくなれば現地人に殺される。死んだら物品と入歯を取られ丸裸にされるのだ。前に見たことがあるので覚悟していた。

マラリアとの闘病生活

一人でフラフラ歩いていたら狼部隊のトラック

隊が来て「貴様どこの部隊か」といわれ「福島だ」と話した。私が東北弁で、福島県人ばかりの部隊だったのでトラックに乗せてもらいキニムジョ狼の兵站病院に入院させてもらった。入院後二日間は脳炎で何も分からず、軍医の診断時に耳にさした聴診器が牛の鼻環に見えたので頭を殴ったそう

だ。
また前に立っている兵隊を敵さんと思い、銃で突っ込んで皆に足を叩かれ正気になり軍医に絞られた。夜水を飲みたくて庭の水溜りを見つけ飲んだら、明るくなって見ると兵隊の小便であった。また顔を洗うと熱が出る。それから三カ月ぐらいは洗わなかった。

体調も回復したある日、ビルマ人の所に遊びに行った。ビルマ人は日本軍に礼をしたいと言う。事情を聞くと「舗装道路はイギリス人が歩き、脇の副道を牛馬や現地人が通る様にされていたが、日本軍が来たお陰で差別が無くなった」と喜んで

病院からタドンに行き検査、体調は良くなったとはいえまだ一人で歩くことが出来ず、両脇を兵隊に支えられて夢中で歩く。汽車に乗せてもらい、時々空爆に遭うと貨車の下に潜り助かった。マルタバシより幅三キロ以上もある河を三十分ぐらいかかって渡った。モールメン兵站病院に入院した。ここの病院では病人にも飯上げさせる。夢中でバツカン（バツカン）を担ぐ、酷い所だ。「貴様等は一銭五厘だ」と馬鹿にされる。

あの戦争で泰緬鉄道を建設、武器弾薬や兵員の輸送に必要な架橋工事を強行した鉄道第九連隊は六千九百八十二人が死亡し、終戦後、生き残った幹部の軍人は戦犯として処刑されたのです。

私は重病となり歩くことが出来ず戦友に支えられ渡河し、カンチャブリの土手にいたらイギリス軍捕虜が私を見て道路まで背負って行き、水を飲ませてくれ助けられた。その後元気になる。あの軍人には今でも思い出して感謝している。

終戦

六月二十六日、泰国に入りバンコクの第一六陸軍病院に入院することが出来、初めて白衣を着た。泰国は交戦国でなかったので平和であった。七月六日転進され、プノンペンの第一四九陸軍病院に入院、ここで療養し元気になる。その後コンポンチャム練成隊に入り、豚の飼育や鶏の飼育などをする。

コンポンクウニヤンに使役に行ったら青田村の遠藤君が入院していた。前に会った時、足に巻いていた毛布を取って見たら疥癬かひせんが酷く、足に蛆がわいていた。二人で蛆取りをしたので今度は良くなったと言っていた。

自動車で品物受領に行く。何だか今日は住民が変だ品物が値上りしている。不思議に思っていると病院より迎えに来て直ぐ帰れという。病院に帰ったら前の外科病院で「わっ」泣き叫ぶ声が高い。日本は戦争に負けたとのこと、明日は手足のなくなったダルマ病人は皆殺し、兵隊は去勢し、日本魂を何とかするとか、何だか分からないデマで大

騒ぎとなり、重要書類等は全部焼き払う始末である。南方軍の元氣な者は最後の一兵まで戦うのと言う。

私は八月十日、四国の壮歩兵第一四四連隊に編入となる。連隊長は吉田章雄大佐。

プノンペンで陸海軍人に賜った勅令、南方軍將兵に与える訓示を寺内寿一大将から全員受ける。

「皆最後まで内地帰還するのを待て」と訓示される。その後プノンペン市街地でフランス人の護衛の警備などに日本軍は使われた。その後ロメヤスに移動し、ここで武装解除をされた。持ち金は全部出す、新兵器は河に投げ、古い兵器の菊の紋章は削り取った。フランス兵はこの事実を知らないから、日本軍はこんな武器しか無かったのかと笑っていた。

ロメヤスよりベトナムに移動する時、部隊長の乗馬を現地人に託して我々は汽車で出発した。すると軍馬は部隊長を追って列車の後から走ってくる。この姿を見て皆涙を流した。ベトナムに移動

する経費を係が持ち逃げしてしまったので毎日山に入って薪を取り、炊事に苦労した。

ベトナム入り

バリヤで「安達郡の者はいるか」というので返事をしたら勇部隊の今井健君だった。夜今井君の所に行ったら正月なので部下に捕らせた魚や酒や餅などを御馳走になり、帰りには鯨の缶詰六個も頂いて来て皆で食べた。勇部隊には渡辺喜伝治氏もいたそうだが、夜六時後は外出禁止で行けなかった。私の部隊は四国高知の壮兵団で四年も五年も除隊がない兵隊が多かった。

そしてバリヤを出発、毎日十里ぐらいの行軍でロンタンに着いた。毎日昼食後の一時間は遊泳の時間だった。私は海の遊泳は初めてでもあり海は駄目だった。百メートルも沖に出ても戻れなくなつた。手を上げて助けを求めたら助けに来た人が私より後ろで溺れている人の方に行つてしまつて私は駄目。泳いでも少しも岸の方に戻れないので仕方なく海の中に潜り底を歩いて浅い所ま

で戻った。

豆腐作りをした時不審番にずるい奴がいて時間を誤魔化す。豆をうるかす番の兵が二十分も早く起されて仕事にかかり、豆がうるかし過ぎになつて臭くなつて全部オカラにしたことがあつた。

私が薪集めの当番で山に入った時、急にザワザワとするので黙つて見ていたら、猿の大群、百匹ぐらいが木から木に移動していたのだ。何もしないで帰つて現地人に話したら騒いだり石を投げたりすると猿が襲つて来て殺されるとか。その後私は怖いので別の場所で薪を取ることにした。

自給自足

田を耕す馬耕を作つたが、四国の兵隊の中には馬耕をした人がいないので、私が部隊の軍馬を借りて来て鞍を直して毎日二反歩づつ耕した。桑の葉など七日ぐらいで食べる。キュウリ、南瓜、ナスも水さえ掛ければ無肥料で作れた。

ある日、現地人が娘二人を連れて来て、どの娘でもくれるから娘の婿になれと言われた。私は故

郷に妻子がいるからと断つた。美しい女だつた。婿にでもなつていたら村長にでもなつたかも知れない。その後、毎日五、六人が私の仕事を見学に来ていた。田の耕作が終ると、今度はアヒル当番になる。また池には魚がいるので全員仕事を休んで池の水を払い、鰻を箱に三つも捕り、毎日鰻料理を味つたが、三日もすると飽きて駄目だつた。

復員

昭和二十一年四月二十九日、アメリカの「リイバテイ」で「ベトナム」の「サンジャック」から復員することになる。荷物の検査、写真、刃物など全部明細書に書き、多くと取り上げられる。

アイウエオ順で私がいつも一番先に名前を申告して出ようとしたら、尋問すると言つて戻される。マライにいたことがあるかといわれ「ありません」と返事したらパスといわれた。弓削中尉が私を突き飛ばすように急がして通過させてくれた。有り難い。

その場には何かされたと言う女達が首実験のた

め十人ぐらいが来ていた。兵隊が少なくなると、誰でも構わず少しトッポイ奴が指さしされる。そしてその人が無実の犯人とされてしまう。

やがて検査も終わり乗船する。帰りは敵潜水艦の脅威も無く、皆甲板上に出て広い海を眺めた。やがて台湾も近くなつた船の後の方には真黒になつてマグロの大群が追つて来るのが見えた。

やがて復員船は九州の博多港に入港、二年振りで見ると日本に帰つてきたのだ。直ちに上陸、検疫後、再会を約束してそれぞれの郷里に向つた。

焦土となつた東京、横浜その他大都市はほとんど見る影もない、惨めな姿であつた。我が家に到着したのは五月十二日であつた。出征後生れた子供は三歳になつていた。それから敗戦国再建のため不自由な物資不足の生活に耐え、平和日本建設に働き、何不自由のない平和な日本となつた。あの時のような悲惨な戦争は子供には味わいたくない。これからの我が国を背負う若い方々に言う。永遠の平和の尊さを考えていただきたい。この大

戦で亡くなられた幾百万の英霊も草場の陰で念じていることでしょう。平和を祈念する。